報　告

平成28年熊本地震「被害調査と学生ボランティア」

安富　　信[1)]

1．熊本地震発生

2016年（平成28年）4月14日午後9時26分，熊本県熊本地方の深さ11キロでマグニチュード6.5の地震が発生．熊本県益城町で震度7を記録．熊本市東区や宇城市など広範囲で震度6弱などを記録した．当初，これが本震と考えられていたが，4月16日午前1時25分，熊本県熊本地方の深さ12キロでマグニチュード7.3の地震が再び発生．益城町と西原村で震度7，南阿蘇村，熊本市中央区，東区，菊池市，宇土市などで震度6強，6弱も阿蘇市，熊本市南区，北区，八代市など広範囲で記録した．このため，2度目の震度7の地震を本震とし，14日の地震は前震と考えられている．いずれにしても，最大震度7の地震が2日ほどの間に，立て続けに起きた，日本では近年まれに見る大地震となった．本震の後も震度6弱や5程度の余震が頻発．内閣府が9月14日現在でまとめた余震の回数は震度1以上で2,094回に上る．

この地震は，熊本地方を横断するような形で存在する，布田川（ふたがわ）断層と日奈久（ひなぐ）断層によって引き起こされた直下型地震で，阪神淡路大震災（1995年）や新潟県中越地震（2004年）と同様に多くの民家を倒壊させた．消防庁の情報をもとに同府のまとめによると，熊本県内で8,189棟が全壊，29,567棟が半壊，130,882棟が一部損壊．大分県内で前回9棟，半壊191棟，6,965棟が一部損壊，山口，福岡，佐賀，長崎，宮崎各県でも建物被害が出ている．

死傷者数は9月14日現在で，熊本県で死者98人（2017年1月23日現在で関連死を含めて183人になった），重傷者818人，軽傷者が1,436人となっている．福岡，佐賀，大分，宮崎各県でも負傷者が出た．自宅を無くした人たちが避難した数は，4月17日午前9時30分の避難所855か所に183,882人をピークとする．

2．現地調査

こうした大きな被害状況を見て，社会防災学科を有する神戸学院大学としても，支援と同時に学術的な研究の意味も含めて，教員・職員の現地派遣，学生たちのボランティア派遣などが検討された．その事前調査として，前震発生から10日目の4月23日，現代社会学部社会防災学科教授の前林清和，ボランティア活動支援室の川口謙三，社会防災学科実習助手の前田緑と社会防災学科教授の安富信の4人が現地調査に赴いた．

鉄道路線の復旧が遅れており，鉄路での熊本入りは難しいため，空路，大阪空港から熊本空港へ．現地での移動手段はレンタカーを借りた．

まず，最初に赴いたのは熊本市内．同市内は，中央区，東区が特に被害が酷い状況だったため，わずかな伝手を頼りに，中央区黒髪にある九州ルーテル学院大学を訪ねた．大学の被害は一部少

[1)] 神戸学院大学現代社会学部社会防災学科

し壊れた個所はあったものの，避難所としては十分安全だったため，地区の人たちが最大で2,000人ほどが避難した．こうした避難者に対しての，炊き出しが一つの大きな仕事となった．体育館横にある駐車，駐輪場にビニールシートをかけて，臨時食堂として，避難者たちに炊き出しをふるまった．さらに，学生たちはもう一つ，大きな仕事に取り組んだ．それは，同大学に全国から届いた支援物資の運搬・配達だ．トイレットペーパーや，ブルーシート，タオル，毛布，女性の生理用品など多くの支援物資が次々と届いた．これを地区内の困っている人たちに軽自動車などで毎日配って歩いた．お互いに効率的な連絡を取るために活用したのがSNSの一つLINEだ．

それは，以下の写真のような内容だ．「物資配達要請入りました．住所は○○です」とか「配達先は徒歩で15分程度，車で5分程度です．足が悪いらしく...」などときめ細やかな指示が書かれている．このLINEに登録した学生は100人以上．現代の学生らしい連絡の取り方だ．リーダーの女子学生は「毎日忙しいですが，被災した方，特にお年を召した方が元気になってほしいです」とてき

ビニールシートで覆われた臨時食堂

送られてきた支援物資を運ぶ学生たち

学生同士の密な連絡に役立ったLINE

ぱきと指示を出していた．

熊本城のお花畑に設けられた熊本市のボランティアセンターを覗いた．雨にもかかわらず，4月22日でボランティアの受付823人，活動者が450人，23日には受付1,020人に活動者が1,017人と増え，ニーズに活動者数がほぼマッチしてきたようだ．

雨の中，咲いたテントの花

次に向かった先は，阿蘇郡南阿蘇村．ここを訪れた目的は，この付近にはお年寄りや障碍者たち向けの施設やグループホームなどが多く建設されており，こうした災害弱者がこの地震でどういった影響を受けているかを聞き取るためだ．平素なら熊本県内屈指の観光地で，熊本市内から1時間弱もあれば，村に到着するのだが，アクセス道路が各地で寸断されているため，唯一の道路しか入れない．このため，車両数も多く，2時間以上もかかった．村に着いてまず驚いたのは，「テントの花」だ．すぐ近くにアウトドア用品会社の支店があるため，無料でカラフルなテントを貸してくれるためか，ここでテント生活をする被災者が集まっているようだ．

テントなどを無料で貸し出すアウトドア義援隊

ここで，グループホーム「南阿蘇ケアサービス」でボランティア活動している京都出身の小林政夫さんに，「地震で死傷したお年寄りはいないが，いくつかの施設が壊れてしまい，別の施設に避難している人がいる」と聞いた．「手はいくつあっても足りない」という嘆きの声だった．南阿蘇村のボランティアセンターにもお邪魔した．この時はまだ，県外からのボランティアの募集をしていない状況だったが，もうしばらくすれば，県外からのボランティアの受け入れを始めると説明を聞いて，「今後，学生たちが来ることもある」と受け入れをお願いした．社会福祉協議会が中心になってボランティアセンターを運営しているのだが，初めての経験のようで，逆に多くのことなどを質問されてしまった．さらに，数日後，渡した名刺を頼りにメールが届き，避難所運営上の相談を受け，被災地の大変さを実感した．こうした聞き取りの際に，やはり大事なことは，「神戸から来た」と言うと，阪神淡路大震災の経験者であると思われ，多くの質問を受けることだ．出来るだけ，謙虚にしかし丁寧な応対が必要だと実感した．

予想した以上に移動時間がかかるため，1日目の聞き取り調査はここまで．宿舎の阿蘇市に向かうが，これも一本道しかなく，それも阿蘇山を越えていく山道で，陥没や陥落個所も多く，思った以上に運転に苦労したのも貴重な体験だった．阿蘇市的石という田んぼの真ん中に断層らしきものが見えたので，車を止めて，4人で見学した．田んぼの真ん中の畦道が途中，幅3～4メートルの割れ目が出来ており，そこを境に，畦道が2～3メートルも折れ曲がったようになっている．明らかに断層が表出している現場だった．こうしたはっきりとした断層を見たのは初めてだ．

断層が動いたとみられる阿蘇市的石の田んぼ

日本赤十字のテントも並ぶ，南阿蘇村の避難所体育館

2日目は，再び，南阿蘇村へ．ボランティアセンターから3，4キロ離れた，南阿蘇中学体育館にできた避難所を訪れた．「お風呂」「ガソリン」「給水」といった避難者に重要な情報がホワイトボードに張り付けられていた．この避難所ではノロウイルスの発生があり，ピリピリとした雰囲気だった．体育館前の日本赤十字社のテントがいくつも張られ，診察や除染などが行われていた．テレビ局などの取材陣もおり，インタビューを受けていた．こうした特殊な状況下の避難所では，医療に詳しいボランティアの手が必要だ．

次いで，今回の地震被害で最も大きな被害を受けた益城郡益城町へ．災害ボランティアセンターで，ボランティアの数と仕事とのマッチングなどを中心に聞いた．被災から10日が過ぎて，ようやく被災者の人たちから，家の片づけなどのニーズが来るようになり，ボランティアに来た人たちとニーズがマッチし始めているようだった．

益城町災害ボランティアセンター

東日本大震災が発生した際，ボランティアセンターの立ち上がりが遅いという指摘があった．それは，ボランティアセンターの立ち上げを地元の市町村の社会福祉協議会が担っているため，どう

被災者からのニーズを聞く職員

しても大きな地震などが起きると，被災自治体の建物や自治体職員の自宅などが壊滅的な被害を受けて，すぐに勤め先に出勤できない．さらに，ようやく立ち上げても，全国から一気に多数のボランティアの人たちが押し寄せると，対応ができないため,「少し待ってくれ．ボランティアが多数押しかけると却って迷惑だ」などと本末転倒な対応になってしまうのである．

益城町の災害ボランティアセンターを後にして，次はいよいよ，被災した方々が避難している避難所に向かった．まず，益城町福富にある熊本産業展示場「グランメッセ熊本」へ．名前の通り，大きな産業展示場だが，ここは公的な避難場所には指定されていない．駐車場が広く（2,200台収容），ホール内も比較的ゆったりと場所が取れるため，被災直後から多くの被災者が詰めかけた．訪れたのは4月24日正午前．各地からの善意の炊き出しの前に多くの人が列を作っていた．また，2,200台収容可能な駐車場がほとんど満杯になっている状態だった．ホール内で眠るより，マイカーの車内の方が安心だと言う人も多く，この地震の余震の怖さを表している．車の無料点検やおむつや清浄綿，おしりふきなどの配布，仮設トイレの説明書き，熊本県医師会のペット相談など，多くのボランティアも活躍していた．

倒壊建物が集中している益城町役場周辺を車で回り，多くの人が避難している町総合体育館も訪れた．体育館は，照明類が落ちて使用不可の状態．体育館周りのロビーや小さな執務室などに避難者が溢れていた．「入れ歯洗浄します」や「床の上に寝ていると，様々な健康被害の恐れがありますよ」などきめ細かい張り出しがあった．災害情報の視点から見ると，1995年の阪神淡路大震災，2011年の東日本大震災などで課題とされた様々なことで，ほとんど進歩なく同じ光景が見られたことは非常に残念だった．反面，こうした大災害が発生した際には，様々な情報機器も大事だが，結局は張り紙などの古典的な情報伝達手段が最も有効な手段ではないかとも感じた．「自衛隊の入浴サービス」「各家庭からのゴミ出し」「災

ロビーにあふれ返った避難者

張り出された多くの生活情報

もろくも崩れ落ちた住宅（熊本県上益城郡益城町）

害がれきの搬入について」「り災証明の発行」などなどだ．

最後に，益城町役場周辺の激震地を歩いて回った．阪神淡路大震災の被災地を歩いた21年前を思い出した．直下型地震の典型だ．多くの建物が壊滅的に壊れている．1階が押しつぶされた2階建ての民家．屋根瓦が目の高さより低い位置にある家，家，折れ曲がった電信柱．応急危険度判定はほとんど「赤」だ．すなわち，危険なので建物に中に入ってはいけないというものだ．周囲1キロほどの範囲で言えば，ほとんどが全壊家屋だと言っても過言ではない．表通りから少し路地を入ればもっと倒壊家屋が増えてくる．1981年以前の旧耐震基準の建物が多いのだろうが，中には，新耐震基準後に建てられた住宅も交じっているとみられる．後に，単に新耐震基準だからと言って，震度7の揺れに耐えられなかった住宅がかなりあるという報告もあり，耐震基準の地域性についても議論されなければならないだろう．

3．学生ボランティア

神戸学院大学では，熊本地震が発生した直後から学生たちの自主性を重んじながら，まず，神戸市中央区内の街頭で募金活動を展開した．

そして，学内の災害対策本部などでの議論を経て，現地に学生ボランティアを派遣することを決めた．4月30日から5月1日には現代社会学部社会防災学科の学生12人と引率教職員3人の計15人で避難所となっていた西原村山西小学校を訪れ，トイレ掃除やグラウンド整備などを行ったほか，5月21日，22日の第2陣，6月25日，26日の第3陣，7月16日，17日の第4陣まで，計延べ52人の学生，9人の教職員が活動した．以下は，筆者が参加した第2陣のボランティア活動の概要である．

第2陣の学生，教職員計13人は5月21日午前7時40分大阪空港発の全日空機で経ち，同8時55分に熊本空港に到着．事前の調査から，被害規模の割にボランティアの手が足りていないと言われていた西原村に入ることにし，まず，同村ボランティアセンターに向かい，同センターの紹介で，今回の大地震を引き起こした布田（ふた）川断層直近の布田地区での被災家屋の片付けなどをすることにした．たまたま，同村ボランティアセンターのお手伝いをしている佐賀県の住職・鈴木隆太さんとは新潟県中越地震や中越沖地震以来の友人．「地区を歩いて，ボランティア活動が必要な場所を見つけて，どんどん活動してほしい」とアドバイスされ，13人が3班に分かれて，活動場所を探した．

すでに宮崎県からのボランティアグループら計約100人が活動を展開していた．それでも，一軒

一軒を訪ねて歩くと，いくつか手つかずの全壊の住宅も見つかった．「どうですか？神戸からボランティアに来ました．お手伝いすることはありませんか」と声をかけても，ボランティアに家を片付けてもらえることを知らない住民も多く，「いえいえ，いいです」と遠慮する．そのたびに，「村のボランティアセンターの許可を得てきています」と言いながら，ボラセンにこちらから電話して，職員と話をして，ボランティアを受け付けることにして，初日は4軒で活動をすることが出来た．

全壊の住宅で中に埋もれた家財道具を運び出すのは，実は，ボランティアにとっては非常に判断が難しいことだ．というのも，応急危険度判定で「赤」が張られた住宅には，ボランティアは原則立ち入り禁止だからだ．なので，自宅内の家具などは，家人の方に入って片づけてもらい，外で受け取って運搬車に運び込む．しかし，実際には，宮崎県からのボランティアグループなどは住宅内に入ってしまっており，うちの学生たちには立ち入らないように何度も指導する必要があった．専門家の意見では，やはり，応急危険度が「赤」の場合は，住民でさえも立ち入らないようにする方がよい，とのことだが，これでは，実情にそぐわない．自衛隊などでない限り，立ち入れないことになるが，とてもそんな手はない．「黄」の場合は，専門家の立ち合いのもとで，活動が出来るというのがこれまでの考え方だが，本当に現実にそぐわない．また，被災直後の家庭では，「もう全部捨ててちょうだい」という声がよく出る．しかし，写真など大切な思い出の品物もあるので，念を押すことも大切だ．現実に，いくつかそういう場面があった．

汚れた畳を運び出す学生ボランティア

家の中から壊れた物を取り出し，運ぶ学生

西原村布田地区の全景（写真手前に断層が走っている）

片づけた家財道具などを車に乗せて運び出す

こうした活動で非常に大事なことは，休憩を随時取ることだ．5月下旬ともなると，相当に気温が上がる．正式に計測したわけではないが，最高気温は25℃を超えていた．暑さと水分不足からの熱中症が一番怖い．また，活動している際には感じなかった，「怖さ」のようなものが，心に棘のように刺す場合もある．この日は，熱中症に近い症状にはなったが，大事には至らず，しかし，心の多少の傷を負った学生もいた．また，活動場所のすぐ近くにはトイレはなく，こうしたことへの配慮も必要だ．

移動式の災害用のトイレ，非常に清潔だった

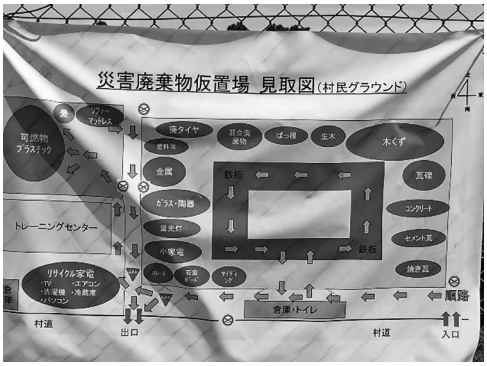
少なくとも，1時間に1度の休憩時間をしっかりと取って，お昼休みも1時間以上十分に．午後も終了は4時．つい長時間の活動を続けたいところだが，我慢も大切だ．「もう少しやりたかったなあ」というくらいが丁度いい．5時過ぎには，阿蘇村にあるリゾートホテルに到着．短く，振り返りをして夕食．出来るだけ早く就寝することも大切である．被災地では，気が張っており，ついつい働き過ぎることもあり，さらに，日常とは違った光景を見続けることによって，心に気が付かない傷を負っていることもある．ゆっくり眠ることにより，こうした心身ともの疲れをいやす必要がある．

お昼休み．楽しくおしゃべりしながら．大切な時間だ

翌日も布田地区で活動した．午前9時から午後3時前まで休憩，昼休みを挟んで終了．日帰り温泉で汗を流して帰路に就いた．6時20分，熊本空港発，7時20分，大阪空港着同45分に解散した．最後に，西原村で見た，がれきの処理場を紹介する．

西原村の災害廃棄物仮置き場は，村役場近くの村民グラウンド（野球場）に設けられていた．リサイクルできる家電，可燃物プラスチック，畳，ソファー，マットレスなどの再生可能なコーナー

西原村内に置かれた災害廃棄物仮置き場



災害廃棄物仮置き場の見取り図

があり，その他，廃タイヤ，ガラス・陶器，木くず，瓦礫，コンクリートなど21に分類して捨てるようにしている．

学生たちの「振り返り」を一部紹介する．

・初日に出会った住民が一人で作業をしていると言っていたが，あの作業を一人ですると なると，どれだけかかるのか気が遠くなるような作業量だと思うが，自分たちが手伝うことで片づけることが出来たので，この体験を通じてボランティアっていいことだと気が付いた
・災害ボランティアセンターの存在を知らない住民の方が多く，びっくりした．
・災害ボランティアセンターに近い地域には，ボランティアがたくさん入り，そこから離れたところには，ボランティアも来ていないという状況もあり，自分たちは離れた地域で活動した．
・2日目は精神的にきつかった．それがごみであるかどうかは，その持ち主が決める事なのに，ボランティアで来ていた他の団体の人たちが片付けをしている際に，すべてゴミ扱いしているのを見ていられなくなってしまった．

4．反省と考察

また，「想定外」の大地震が起きてしまった．しかし，本当に「想定外」なのだろうか．筆者は，今回の熊本地震の現地に2度赴き，そんな思いを強くした．大きな災害が起きるたびに，繰り返されてきた「想定外」の言葉．21年前の阪神淡路大震災，5年前の東日本大震災をはじめとして，この20数年間だけで，どれだけの大災害が日本列島を襲っただろう．地震だけではない，毎年のように繰り返される水害，ここ数年あちこちの火山が噴火するなど，もう「想定外」では逃げることが出来ない事例が積み重ねられている．それにもかかわらず，繰り返される「想定外」という言い訳．今や日本列島で活断層のない地方はないとされている．海洋型のプレート大地震は列島のどこをも被災させる．現に，熊本地震を引き起こした2つの活断層の存在は知られていた．にもかかわらず，「直下型地震が起きるとは思っていなかった」という行政や住民の方々は甘いのではないか．今回，最大の「教訓」はやはり，住宅の耐震化である．新耐震基準以降に建設された住宅も見られるという．なぜか？　そろそろ1981年以降の新耐震基準の見直しや，点検・検証が必要ではないか．耐震基準に「地域性」があるという不穏なうわさもある．こうした不明朗な事柄をもう一度，しっかりと調査する必要がある．

この報告を執筆している途中に，熊本地震発生から半年が過ぎた．テレビや新聞などの報道を見て，初めて，「熊本はまだほとんど復興していないのではないか」と感じる人も少なくないと考える．しかし，その報道に触れない限り，被災地以外の人たちは日常的には，熊本のことを忘れている人も多いだろう．災害が起きた直後は関心が高いが，近年のように次々と起きる災害の発生もあり，忘却の彼方になっていく傾向が強いように思える．こうした「風化のスピードの加速」とも言える状況をどのように打開していくのか，防災に関わる身としては肝に銘じなければならない．

最後に，学生ボランティアのあり方を考察したい．大災害が発生した際，地元の方々，行政の手だけでは，到底人手が足りないのは現実だ．そのためにはボランティアは発災後出来るだけ早く被災地に入らなければならないのは当然のことだ．しかし，今回の熊本地震のように大きな揺れが起きると，大きな余震が頻発するという危険性もある．2011年3月に発生した東日本大震災

時も同様だった．最も多くの人手が必要な時に，ボランティアが来ないという事態が生じている．室崎益輝・兵庫県立大学大学院教授は再々，この点を指摘し，一刻も早いボランティアの被災地入りを提言している．学生ボランティアについても同様だろう．特に，学生のボランティア派遣については，各大学の判断の重要性が増している．学内の様々な災害対策本部，委員会等で検討が加えられることは当然だ．しかし，その派遣の議論が，議論のための議論になっていないか，心配である．もちろん，学生を被災地に連れて行くことには十分な安全性を検討することは大切である．そのためには，専門家を含めた，例えば「ボランティア派遣検討委員会」などの常時設置が肝要である．平常時からボランティアの被災地派遣について，様々な課題を検討し，常に準備をしていることが必要ではないか，と提言する．